



やりたいという気持ちがある育つ場に

新年度スタートから早2カ月半が過ぎました。LABO7の生徒たちも新しい学年・新しいクラスに慣れ、毎日元気よく過ごしています。

小学部で今春から本格的に始めた「音読チャレンジカード」(通称・音チャレ)。毎月、詩・短歌・俳句などの韻文や、有名な物語・小説・随筆文の一部を音読するもので、暗唱できたらスタンプが貯まり、スタンプの数が多い子は教室の柱にあるランキングで毎週表彰される、というものです。

音読はもともと「シーガルスクール」のSSK(小1~小3クラス)で行っているプログラムで、国語力を鍛える上で効果的なトレーニングの一つとして取り入れています。言葉のリズムを意識しながら声に出して読み上げることで“語感”を養い、ふだん使わない言い回しに触れることで“語彙力”を高めることをねらいとしています。発想力が柔軟で吸収力の高い小学生だからこそ、音読・暗唱をととても大切にしているのです。

例えば、6年生の5月の音読は、島崎藤村の「初恋」。「まだあげ初めし前髪の 林檎のもとに見えしとき …」という一節で始まるこの詩を解説すると、「ああ、そういうことね〜」という声があがる一方で、「えっ、えっ? どういうこと?」という声も同時にあがります。高学年になるにつれて、感情のとらえ方がより複雑化・高度化すると共に、成長や体験に個人差が出てくることもあるため、“誰かに恋をするという感情がまだよく分からない”という子のほうが多いです。しかし「まだ分からなくても大丈夫。こんなときにこういう気持ちになるんだな」と、自分の未知なる感情に思いをはせることは、自分以外の相手の気持ちに寄り添える心豊かな人になる、とても貴重な経験だと考えます。



実際にこの取り組みは、楽しみながら名文を味わう良い機会になっています。ある6年生の男の子たちは、授業日ではない土曜日にLABO7を訪れ、「先生、『初恋』を覚えてきたので聞いてください!」と自主トレの成果を披露してくれました。

また、LABO7の本棚スペースの一角に、思考力系のパズルやカードゲームが登場しました。その中のあるパズルが小4クラスで密かなブームに。ゼミの始まる前や休み時間に、時にはただひたすら黙々とパズルを組み替え、時には「これをここにもっていったらいいんじゃない?」と意見を出し合いながら、難度の高い形を次々とクリアしては「先生、できました!」の音が教室内にひびきわたります。



このように、LABO7の空間全体が子どもたちにとっていろいろなことを「やりたい」という気持ちがある育つ場になるように、気持ちをこめて様々な取り組みを進めていきます。